



洞穴のクマは天使にふれる



学籍番号：19J23

氏名：千田侑加

目次

1. ハンドシェイク・カフェ(p 2～3)
2. クマくんの手(p 4～5)
3. 君に伝えたいこと(p 6～7)
4. 花と手紙に思いを乗せて(p 8～9)
5. 近づく心(p10～14)
6. アクアリウムでのエンカウト(p15～18)
7. 洞穴のクマは天使にふれる(p19～22)

スマホで調べた検索結果の中に、見慣れない名前を見つけた。目に見えない力に吸い寄せられるように、私は画面をスクロールしていた指先を止める。

「“ハンドシェイク・カフェ”？」

最近できたお店なのだろうか。この辺りにあるカフェは大体知っているし、行ったこともあるけれど、これは初めて聞く店名だ。

「今週の土曜日は、ここに行ってみようかな」

うきうきとスキップを踏むような気持ちで、行ってみたいリストに、お店の情報を保存する。どんなカフェなんだろう。洋風の外観？ 古民家？ それとも今どきのスタイリッシュな感じかな。これまで行ったカフェを思い出しながら、私はスマホの電源ボタンを短く押して、立ち上がった。

そのカフェは、私が住んでいるアパートから、歩いて10分くらいのところにあった。いつも通っている道からは外れているルートのため、気づきにくいのも納得だ。

「こんにちはー」

挨拶をしながら、レトロな感じがする焦げ茶色のドアを開けると、チリリンと小鳥が付いたデザインのドアチャイムが鳴った。テイクアウト中心のカフェなのか、中はこぢんまりとしていて、ベンチや椅子はあってもテーブルは置かれていない。

「いらっしゃいませ」

飴色のツヤがある木製のカウンターには、エプロンをつけたマスターらしき男の人がいて、柔らかな笑顔で声をかけてくれた。歳は30代後半くらいに見える。180は超えていそうな背丈と、筋肉でがっちりとした大きな体なのに、威圧感は不思議と無い。整った顎髭も相まって、なんだか森のクマさんみたいな人だった。

「こちらのメニューから、お好きなのをどうぞ」

カウンターに貼られたメニューを見ると、けっこう色々な種類のドリンクがある。あ、スイーツも持ち帰れるみたいだ。どれにしようかな。

「このジンジャーミルクって、どんな飲み物なんですか？」

「牛乳に、ショウガのシロップとキビ砂糖を入れたものですよ。配合、頑張りました」

「美味しそう！ それじゃあホットのジンジャーミルクと、リンゴのデニッシュをお願いします」

「かしこまりました」

マスターがカウンターの隣のスペースに移動する。そこは白木の壁で覆われていて、板には楕円形の小窓があげられていた。中は布で隠れていてよく見えないし、顔を出すには狭すぎる気がする。これは何に使うんだろう。しげしげと眺めてみるけど、壁に描かれた緑のツタや色とりどりの花が可愛いことしかわからない。そのまま待っていると、マスターが出て

きた。でも、彼の手には、カップもデニッシュも見当たらない。

「お客さん、この店は初めてですよ。うちでは、クマくんがドリンクとかを渡してくれるんですよ」

「クマくん？」

得意そうな顔のマスターの言葉を、ぱちくりと瞬きをしながら繰り返す。ファンタジーでメルヘンな響きに小首を傾けると、小窓から、ミルクチョコレート色の毛に覆われた両手がゆっくりと出てきた。手のひらにある大きな肉球と爪は、黒い皮のような素材だ。爪の先が丸くなっているのが、痛くしないようにという配慮のようで、何だかほっこりする。そろりと手を伸ばして、お店のロゴが書かれたカップと、包みに入ったデニッシュを受け取る。その時、もふもふの手がびくりと小さく震えたように感じた。

「ありがとうございます」

向こうには見えなくても、頭を下げてお礼を言う。出てきたときと同じように、ゆっくりと手が小窓に奥に引っ込んでいった。

「シャンハイのカフェを参考にしたんですよ。ユニークでいいでしょう」

カウンターに品物を置いてから、お会計をする間、マスターがにこにこしながら話してくれる。見えるのは手だけなんて、確かに面白い発想だ。

「もしかして、店名のハンドシェイク(握手)って、こういうことですか？」

「そう。誰かとのつながりを印象深くしたかったんです。よかったら、また来てくださいね」

「はい！」

まだ温かいカップと包みを抱え、ぺこりとおじぎをしてから店を後にする。ドアを開けてから振り返ると、マスターの他に、小窓から出たクマくんの手が、こちらに手を振っていた。

早足で家に帰り、どきどきしながら、ジンジャーミルクに口をつける。チャイと似ているようで違う、不思議な風味と優しい甘さだった。ふわふわに泡立てた牛乳の口当たりもいい。ついカップを傾けると、ふわふわの下から熱い牛乳が流れ込んできて、びっくりしてしまった。

デニッシュに歯を立てると、焼き立てだからなのか、バリバリパリッと表面が軽やかにくだける。中はふんわりしていて、甘酸っぱくて熱いリンゴのクリームがどろりと零れた。口の中をやけどしないように気をつけないと。

ふうふうと息を吹きかけながら、ゆっくり交互に食べたり飲んだりする。ショウガらしい体の底から温まる感じがしてきて、やがてデニッシュの表面も、しっとりとした食感になっていった。今度行くときは、何を頼もうかな。

それから私は、ハンドシェイク・カフェによく通うようになった。「シャイなクマくんが、マスター特製の美味しいドリンクやスイーツを手渡してくれる」と話題になっているようで、順番待ちをする日もある。

「ほら、ちいちゃん。クマさんにありがとうって」

「くまさん、ありがとー！」

今日、私の前に並んでいたのは、2人の親子だ。お母さんがクマくんからオレンジジュースとカフェオレを受け取り、お母さんからオレンジジュースをもらった幼稚園児くらいの女の子が、あどけない笑顔で元気にお礼を言っていた。

「いらっしやいませ。今日はどれにする？」

「ココアとワッフルをください」

「分かった。いつもありがとうね」

そんな微笑ましい光景の横で、私も注文をした。マスターの熊谷(くまがい)さんは、初対面の人には敬語を外さないけれど、顔見知りになった人にはくだけた口調になる。丁寧さは忘れていないままで、親しみやすい雰囲気があるから、色んな人に好かれやすいのかもしれない。

小窓から、ひょっこりともふもふの手が出てくる。どうぞ、と言うように差し出された、カップと包みを受け取って、私はいつものように頭を下げる。

「ありがとうございます」

クマくんは、どんな人なんだろう。野暮かもしれないけれど、このカフェに来る度に、そのことを考えるようになる。

私は、この人の顔を知らない。声も、性別も、性格も、年齢も、ここで働いているわけも、何も知らない。気になるけど、この人にとって、ふれられたくないことかもしれない。

だから、あなたと話してみたいという思いを、感謝の言葉に込めてみる。いつか届いたらいいなと、ささやかな祈りに似た願いを忍ばせながら。

それを見つけたのは、ハンドシェイク・カフェに向かう道の途中で、だった。

ホコリや土がついているかもしれないので、拾い上げて軽くはたく。よくよく見てみると、見覚えのあるミルクチョコレート色の毛並み。もふもふの手触り。大きな肉球。先が丸い爪。間違えるはずがない、クマくんの手だった。

どうしてこんなところにあるんだろう。落としちゃったのかな。

辺りを見回してみても、それらしい人はいない。困っているだろうし、行くついでに届けよう。そう思って、私は大事にクマくんの手を抱えて歩き出した。

覚えた道を進んでいき、角を曲がったところで、思わず立ち止まる。パーカーのフードを深く被って、しきりにキョロキョロしている人がいた。挙動不審と言ってもいいくらいの動

きで、怪しい人なんじゃないかと心配になる。でも立ち止まった理由は、それだけじゃなかった。必死で何かを探しているような、あの動き。クマくんの手を、ぎゅっと胸に抱きしめる。

そろり、そろりと、少しずつ足を踏み出して近づいていく。パーカーとジーンズに包まれた細い体。フードとマスクのせいで、やっぱり顔は見えないけど……。

「あのう……」

「！！」

驚かさないように、後ろじゃなく隣に立ってから、声をかける。それでも驚かせてしまったようで、その人は耳元でクラッカーでも鳴らされたかのように、体を跳ね上げた。

「ごっ、ごめんなさい。びっくりさせて」

「……！……！」

慌てて謝り、改めてその人は正面から見る。長く伸びた前髪の奥から、怯えきったような瞳が見えて、私は息を呑んだ。

「あの、もしかしてこれ、」

1歩踏み出すと、その人は私を見たままで、1歩下がる。あれ？　と思ってまた1歩近づくと、彼もゆっくり後ずさりをした。3回くらいそれを繰り返したところで、やっと気づく。

もしかして私、ヒグマみたいな扱いされてる？

私と私を持つクマくんの手を、交互に見ながら、その人はかたかたと体を震わせていた。声にならないような息遣いも、かすかに聞こえてくる。初対面の私に、どうしてこの人がこんなに怖がっているのか分からないけど、どうしたら……。

「……………ソ……ッ」

そのとき、ひっくり返ったような音が聞こえて、次にか細いけれど訴えるような声をした。

「……そ、そそそ、それ……っ」

女性には出すのが難しそうな、中低音の声。アスファルトに向けられた顔。ぷるぷると定まらないまま、クマくんの手に向けられた人差し指。数秒くらい固まってから、私はゆっくりクマくんの手を地面に置いた。そして、ひょこひょこ後ろに下がり、距離を取る。何もしませんという意味表示のために、軽く両手を挙げた状態で。

「もしかして、クマくん……ですか？」

離れた場所から問いかけると、その人は、かすかに頭を揺らした。その動きは、油をさしていないブリキの人形みたいにぎこちないけど、頷きに違いない。それを確認してから、私は頭を下げた。

「いつも、ありがとうございます」

顔を上げると、前髪に覆われたその人の目が、ハッとしたように大きく見開かれていた。

今日は、カフェに行くのは諦めよう。これ以上彼を怖がらせないように、私は軽く一礼してから、きびすを返して走り去った。

世界には、色々な声がある。

「くまさんの おてて、ふわふわー！」

「やばー、マジでクマの手じゃん。ウケる」

「本物みてえ！ かけえ！」

耳にキンとくるような無邪気な声。昔のことを思い出すような、鼻にかかった声。これから低くなっていくような、まだ幼さの残る高い声。

「ありがとうございます」

あの子の声は、他の人とどこか違って聞こえた。もし声に輪郭があったとしたら、ふんわりと丸みを帯びていそうな響きの声だった。

カバンを開けたときは、呆然とした。入れてきたはずのクマの手が片方なくて、気づいたら無我夢中で店を飛び出していた。あの手は、叔父さんがくれた、新しい俺の居場所の象徴なのに。どうしよう。何で落とした。どこで落としたんだ。早く見つけないと。早く、早く、はやく……！

急いで、焦って、頭の中がグルグルして、嫌な汗で体が冷えてきて。そんなときに話しかけてきたのが、彼女だった。

「……なるほど。店の外であの子と会っちゃって、それで思い切りビビってしまった、と」

あちゃー、と叔父さんが額に手を当てる。俺は靴を脱いで、店内のベンチに体育座りをした状態で、丸く縮こまっていた。店はまだ開けていないので、人が来る心配は無い。

「……まだ、人が怖いか。純平」

「……うん」

クマの手の片方を握りしめたまま、答える。誰も彼もが、自分に鋭く研いだナイフを向けてくるんじゃないかという恐れは、まだ俺の中に住み着いている。刻み込まれた傷は、心の柔らかい部分を壊して、今も不具合を起こしたままだ。

「……でも……」

ありがとうございます。

いつも、ありがとうございます。

それ自体は、ありふれた感謝の言葉で。でも自然と心にしみていくその言葉を、彼女は店に来る度に言っていた。無理に干渉してこないところや、尖っていないまろやかな声が、気持ちもちを落ち着かせてくれた。

「……話したくない、わけじゃないんだ」

あの子、今日も来てくれるのかな。そんな風に、声しか知らない彼女を待ちわびるようになったのは、いつからだっただろう。飲み物とお菓子を渡して、彼女の「ありがとうございます」

ます」を聞いて、ただそれだけの関係なのに。何をどうしても、店員と客でしかないのに。

「……クマの手。拾ってくれて、ありがとうって……言いたかった」

目の奥が熱くなって、じわりと視界がにじむ。こんな自分が、普通にできない自分が、不甲斐なくて、情けない。

「それなら、ちゃんと伝えようぜ。あの子に」

大きな手が、俺の肩に置かれて、ほんのりと熱が伝わる。奮い立たせるような、力強さのある声に、引っ張られる気持ちで顔を上げる。

「今は言うのが無理かもしれないけど、伝える方法ならいくらでもあるんだ」

小さい頃、泣いていた俺と視線を合わせて、励ましてくれたときと変わらない。強くて、温かくて、真っ直ぐな瞳だ。

「大丈夫。お前ならできる」

そういえばあの子も、叔父さんみたいに、真正面から俺と向き合ってくれたんだっけ。俺の方は及び腰というか逃げ腰というか、もう逃げかけていたようなものだけど。

目じりが少し下がっているせいか、威圧感を与えない叔父さんの目を見つめ返して、俺は首を縦に振った。

私がハンドシェイク・カフェを訪れたのは、それから1週間後だった。少しだけ、クマくんに会うのが気まずかったけど、顔を合わせるわけじゃないからと自分に言い聞かせる。それに、熊谷さんにも会いたいし。あそこの飲み物やお菓子、美味しいし。

「こ、こんにちは」

「いらっしゃいませ！ 今日はどうする？」

「えーと、フルーツティーと、シャインマスカットのミニパフェをください」

「はい。そこのベンチに座って待っててね」

熊谷さんの様子は、いつもと変わらなくて、ベンチに腰かけたときに、ほっと息をつく。少しだけ、緊張していたのかもしれない。あとは普段通りに、小窓から出てきたクマくんの手から、注文したものを受け取れば大丈夫、なはず。

ゆっくりと、あの日拾ったもふもふの手が出てくる。紅茶に切った果物を入れた、カラフルなフルーツティーと、黄緑色の宝石みみたいなマスカットや白いクリームのコントラストが綺麗なパフェ。だけど、いつもと違うものが1つあった。

可憐なピンク色のガーベラが1輪と、小さな白い封筒が1通、クマくんの手握られていたのだ。

「これ、私にくれるの？」

注文したもの以外をクマくんがくれることなんて、初めてだったから、本当に貰っていいのか気になってしまう。聞いてみると、クマくんの手が頷くように上下に揺れて、ずい、と私の方に伸びてきた。カップと一緒に受け取ると、ガーベラは造花だということが分かる。布でできた花びらと、ワイヤーが入った茎。それでも可愛らしさは、本物と変わらない。

「ありがとうございます」

いつもと同じやり取りをして、カフェを後にする。帰宅して、手軽なサイズで爽やかな甘さのパフェをべろりと食べてしまってから、私は手紙を開いた。

『初めまして。熊谷 純平といたします。

この前は、クマの手を拾ってくれて、どうもありがとう。

それと、失礼な反応をしてしまって、ごめんなさい。

よかったら、またお店に来てほしいです。』

「クマくんは、純平さんっていうのかあ」

初めて知ることが出来た名前を、キャンディのように舌の上で転がしてみる。黒いボールペンで書かれているのは、読みやすい綺麗な字。そして本人の誠実さが伝わってくるような、丁寧な言葉が並べられていた。手紙を離れたところに置いて、フルーツティーを口にしながら、スマホで少し調べ物をする。ガーベラについて検索すると、育て方の他に、花言葉が出てきた。興味がわいてサイトを見てみると、色ごとに違う花言葉が出てくる。花そのものだと、「希望」と「常に前進」。赤は「神秘」や「チャレンジ」。オレンジは「冒険心」、「我

慢強さ」等。他にも色々な意味を持つみたいだ。そして気になるピンク色はと言うと……。

「『崇高美』と、『感謝』……」

花に詳しい人なのかな。花に思いを乗せるなんて、ロマンチックで素敵だ。何だかくすぐったいような気持ちが、胸の中で弾ける。

もらったガーベラは、洗って乾かしておいたカフェのカップに、いけておくことにした。お花があるだけで、部屋の中がぱっと明るく華やいで見える。私は口元を緩めて、花を人差し指でつつきながら、また紅茶を1口飲んだ。

「後で、レターセットを買いに行こうかな」

出会ったのは、花咲く森の道じゃなくて、アスファルトで舗装された歩道。落とした物は、白い貝殻のイヤリングじゃなくて、もふもふのクマの手を模した手袋。落とし物をした人は、お嬢さんじゃなくて、クマのほう。

『初めまして。私は花守 天羽といます。

天羽は、あまは と読みます。

お手紙とお花、ありがとうございました。嬉しかったです。

純平さんと、こんな風に、手紙でお話してみたいと思ってます。

よかったら、お返事ください。』

白地にクローバーとシロツメクサの絵が描かれた封筒の中から、同じ柄の便箋を取り出して眺める。少し丸くて可愛い字で、礼儀正しい文章が並んでいる。まさか、返事がもらえるなんて、思ってもみなかった。

「はなもり、あまはさん……」

声だけじゃなく、名前もふんわり柔らかそうだった。あんな態度を取ってしまったのに、俺と話をしてみたい、なんて、花守さんは不思議な女の子だ。これまで接したことが無いタイプの人。でも、手紙を使って話をするのは嫌だと感じなかった。対面で会話をするわけじゃないからかな。

彼女は、どんな人なんだろう。他人を苦しめて踏みにじることに、楽しさを見出す人ではないと思う。店に来たときでも、初めて顔を合わせたときでも、彼女は相手への丁寧さを忘れていないように見えた。

この子のことを知ってみたい。関わってみたい。

それは、人が怖くなった俺にとって、久しぶりに感じる願望だった。俺は彼女からの手紙を大事にしまってから、机の上に下書きのためのルーズリーフを広げた。そこで改めて、家にもともとあったレターセットを眺めて思う。

「……便箋、シンプルすぎるかな」

封筒も白。便箋も無地の白。お礼を言うには良いかもしれないけど、女の子に渡すなら、もっと模様とかが入った可愛いデザインのものの方がいいのだろうか。これのままじゃ、味も素っ気もないと思われるんじゃないか？ うーん、後で叔父さんに相談してみよう……。

『俺は誰かと文通をしたことが無いので、何を書けばいいかよく分かっていません。

でも、俺も花守さんと話をしてみたいです。

君のことを、教えてください。』

『私は、峡後大学の1年生です。
趣味はカフェ巡りで、このお店もスマホで調べていた時に見つけました。
好きな食べ物は、甘いものです。
純平さんの好きなものや、好きなことは何ですか?』

『俺は、本を読むことが好きです。
小説とか、エッセイとか、けっこういろいろ読みます。
絵を描くことも好きです。
花守さんは、本は読みますか?』

『私は、話題になっている本とかケータイ小説の中で、気になったものを読むだけなので、
普段はあんまり読む方じゃないんです。
純平さんの好きな本やおすすめの本があったら、教えてほしいです。』

だいたい週に1回ずつ。手紙を交わすにつれて、少しずつ、相手のことが分かっていく。
花守さんは店に来る度に、ドリンクと一緒にスイーツを買うほど甘いもの好きなこと。大学
1年生と言うことは、浪人していなかった場合、俺と同じ年の可能性があること。休みの日
にカフェ巡りをするくらいなので、多分、外での活動は苦に感じないだろうこと。他には、
実家を出て1人暮らしをしていること。叔父さんと俺が働いているあのカフェを、本当に
好いてくれていること。

『ファージョンの【ガラスの靴】は、童話のシンデレラが基になっているので、読みやすい
んじゃないかと思います。バーネットの【小公女】もハッピーエンドなのでおすすめです。
俺が個人的に好きな話は、太宰治の【駈込み訴え】(かけこみうったえ と読みます)です。
あちこちに散りばめていた伏線を、最後の1行で全部回収していく感じが好きなんです。』

『いろいろ教えてくれてありがとうございます。
大学の図書館で探してみます!』

花守さんの手紙は素直で、ゴシップをつつきまわすようなものとは違う、純粋な好奇心が
見える気がする。叔父さん以外で、俺の話をおんなに聞いてくれる人なんて、何年ぶりだっ
け。中学の時以来かもしれない。何だか胸の辺りが、陽だまりの中にいるみたいに温かい。

もっと、いろんな話をしてみたい。もっと、たくさん話をしてみたい。

某コーヒーチェーン店では、店員がカップにメッセージ等を書くことがあるらしい。少し
ペンを止めてから、俺は思い切って、手紙の最後に自分のメッセージアプリのIDを書き込
んだ。

家に帰って手紙を開くと、封筒の内側にたくさんのバラの花が咲いていた。

純平さんが最近くれるようになった封筒は、外側は無地の白なのに、内側に模様や絵が入っているおしゃれなものだ。この前はパンジーの模様、その前は果物と花瓶の静物画、さらにその前は紅葉を描いた風景画。どこのお店で見つけたんだろう。後で聞いてみよう。

「……あれ？」

手紙の最後に、いつもは無いものを見つけて、私は思わず指先でなぞる。これはもしかして、LINEのID？ 純平さんの方から教えてくれるなんて、少し意外だけど、それ以上に嬉しくもあった。これは、純平さんと仲良くなれているって思ってもいいのかな。試しにLINEでID検索をしてみると、登録されている名前から見ても間違いなことが分かったので、友だちに追加した。

『今度の日曜日、時間空いてますか？』

そんなメッセージが届いたのは、手紙からLINEで話すようになって、数日後のことだった。『時間あいてますよ』とメッセージを返すと、すぐに既読が付く。

『もしよかったら、どこかに出かけませんか？』

『私はいいですけど、純平さんは大丈夫なんですか？』

人と話すの、苦手なんじゃ……』

『俺は平気です。人と対面で話す練習がしたいって、俺が思ったので。』

花守さん、行きたい場所とかありますか？』

行きたい場所……。動物園、水族館、遊園地。ショッピングモール、映画館、スポーツアトラクション施設。体を動かしたり、何かに集中したりするような場所よりは、ゆっくり話が出来そうな場所の方がいいかな。公園とか喫茶店とか……。

『ブックカフェとかどうですか？ この近くに、白い壁に赤い屋根の、絵本に出てくるお家みたいなカフェがあるんです』

1回行ったことがあるカフェを思い出して、提案してみると、本好きな純平さんはとても興味を示してくれた。もちもちした樽型のゆるキャラが踊っているスタンプが来て、つい、クスッと笑いがこぼれる。意外とゆるい感じのキュートなキャラが好きなことが、LINEを通して分かったことだ。

「そうだ。日曜日、何着て行こう」

男の人と、2人きりで出かけることなんて、今まで無かったから分からない。デートだったら、例えばガーリーな花柄やレースのワンピースとかで決まりなんだろうけど、私と純平さんは彼氏彼女の関係じゃないし、そもそも仲良くなっている途中だ。変に意識しないで、ほどよくラフに、かといって可愛さを忘れていない格好……。うわ、もしかしたら、レポート課題並みに難しい問題かも。

「こ、こんにちはっ」

「あ、……その、こ、こんにちは……」

日曜日。待ち合わせ場所兼目的のブックカフェで、私たちは再会を果たした。純平さんは白いパーカーにジーンズという素朴な服装。私は白いシャツにシンプルな灰色のニットベスト、それとクリーム色のチェック柄スカートを合わせている。純平さんは緊張しているのか、少し顔が強張っていて、まだちょっとだけ、おどおどしているように見えた。

「フェアリーテイルって、妖精の尻尾って意味ですかね」

「……フェアリーテイルは、おとぎ話ってという意味。尻尾のテイルとは、確かつづりが違うはず……」

「純平さん物知りですね」

カフェの名前と、静かな声で語られた純平さんの知識で少し賢くなってから、お店の中に入る。壁に作りつけられた本棚には、たくさんの本がずらりと並んでいて、すぐに純平さんの目が釘付けになっていた。長い前髪の間隙から見える瞳が、心なしかキラキラ輝いているように見える。それだけで、ここにきてよかったと思えた。メニューを見たときもそうだ。

「『不思議の国のアリス』のEAT ME ケーキ、『大どろぼうホッツェンプロッツ』のプラムケーキ、『若草物語』のブラマンジェ、『モモ』の金色の朝食セット……。すごい。いろんな物語の食べ物がある……！」

「『赤毛のアン』のイチゴ水と、『小さなスプーンおばさん』のコケモモのジャム付きパンケーキ美味しかったですよ。あ、『小公女』の真夜中のパーティーセットっていうのもあります！ これって、セーラとアーメンガードとベッキーの3人でやろうとしてたパーティーですよ」

初めて来たときは、本のタイトルよりも食べ物の名前に注目していたけど、今は違う。純平さんが教えてくれたタイトルがあるから、どんな話の、どのシーンの食べ物なのか少し分かるようになった。

今回、私が注文したのは、『長靴下のピッピー』のパイナップルプディング。純平さんが注文したのは、『天国を出ていく』（前に純平さんが教えてくれた、ファージョンの短編集に載っているらしい）の、天国の王子さまたちのコンポート。3つの果物の中から、彼はリンゴを選んでいて。

「……あの、俺、19歳なんだけど……花守さんは？」

「え？ 私も19です」

「……じゃあ、敬語とか、さん付けとか、無くていい、から」

「そっか、同い年だもんね。それじゃあ、純平くん」

「……ん」

これまで手紙やLINEで話していたからか、ハプニングみたいな感じで初めて会ったときと比べると、ちゃんと話せている。純平くんは言葉をじっくり探しているような話し方を

していて、森林の中を吹き抜ける風みたいに、穏やかな声をしていて。耳を澄ませて聞いていたくなるような、優しい声。

『天国を出ていく』に登場する3人の王子たちは、夕飯に甘く煮た果物を、どんぶりいっぱい食べるんだ。作ってくれるのは、彼らの世話をしている女の人。水晶のボールを投げて、手を叩いて、命令の言葉を叫んで、いろいろこなすんだ」

本棚から出してきた、ソフトカバーの文庫本を片手に、純平くんが物語について語ってくれる。好きなことを話しているときは、言葉がスムーズに出てくるみたいだ。私は相槌を打ちながら、彼の言葉に耳を傾ける。純平くんは、私の知らないことをたくさん知っていて、そんな彼の話を聞いていると、私の世界がどんどん広がっていくみたいなのが感覚がする。背中に翼が生えて、自分が行ったことのない場所を、気の向くままに飛んでいるような気分。

「今日はありがとう。楽しかった！」

「……俺も。楽しかった。……話、聞いてくれて、ありがとう」

甘くて美味しいものを食べて、話をしていただけなのに、大学の友達と過ごしているときはまた違う楽しさがあった。この日、純平くんが教えてくれた物語は、ファージョンの『小さな仕立屋さん』と『小さいお嬢様のバラ』。大学の図書館に、ハードカバーの短編集があったはずだから、そこから探してみよう。

「また、お出かけしてくれる？」

「……うん。花守さんが、いいなら」

心に残るお土産を胸に、私は純平くんの手を振ってから、歩き出した。

ブックカフェにお出かけしたことがきっかけで、私は純平くんと、たまにお休みの日に出かけるようになった。古本屋さんに行ってみたり、有料の日本庭園に入ってみたり、個室だからという理由でカラオケに行ったりしたこともある。純平くんは人生初のカラオケだったことが、あの日のハイライトだ。

「ねえ天羽。この前の土曜日に、猫背の男子と町で歩いてたってホント？」

ざわざわしている教室の中。講義を終えて、ノートやプリントをリュックに詰めていたら、隣の席に座っていた友達が、内緒話をするように少し声を潜めて話しかけてきた。

「そうだけど。それがどうかした？」

「彼氏できたなら言ってよー。私、天羽が幸せになるなら全力で応援するのに！」

「あはは。彼氏じゃなくて友達だよ。最近仲良くなったんだ」

「ちなみにどんな人？」

「んー、人見知りなカフェの店員さん」

「よく仲良くなれたね」

なんとなく、純平くんのことはぼかして説明する。彼のことは、いくら友達でも、一から十まで詳しく説明しなくてもいいかなと思ったからだ。誰にも詮索されないように、鍵付きの宝石箱に宝物を入れるみたいに、自分の胸の内に大切にしまっておきたい。繊細そうな彼を見ていると、そんな風を感じることもよくあった。

「純平くん！」

カットソーにガウチョパンツ、花模様の柔らかいカーディガンを着て、待ち合わせ場所にたどり着く。今日の純平くんは、大きめの緑色のパーカーに、すっきりとした細身のズボンに合わせていて、何だかスタイルが良く見えた。

「純平くんって、パーカー好きなの？」

「……うん。着てると、落ち着く」

「なるほど」

海の生き物のイラストが描かれているブルーのチケットを、2人で買ってから中に入る。薄暗い館内の床や壁に、ゆらゆらと光が揺れていて、水の中にいるみたいだった。見上げるほど大きな水槽の中で、たくさん泳いでいる銀色の魚の群れ。小さな水槽の中で、ちょこちょこ動くカニ。よちよち歩きをするペンギン。砂からにょろにょろ生えているチンアナゴたち。いろんな海の生き物がいて面白い。

「クラゲは体の約90%が水分で、ほとんどのクラゲは死ぬと、水に溶けて消えるんだって」

「え、骨も？ 内臓も？ 何も残らないの？」

「うん。全部。種類によっては、死なずにまた若いクラゲになるのもいるらしい」

「クラゲって儂いねー」

ふわりふわりと、癒しそのものみたいな動きをするクラゲを見つめる。白くてちょっと透明で、ゼリーみたいにプルプルしてそう。クラゲは何を考えているのかな。見ているこっちは、無心になれるけど。

「自然と一体になってるみたいで、俺は好き」

肩がときおりふれあうような距離で、ささやくような純平くんの声が聞こえる。そっと見上げると、純平くんの唇が柔らかくほころんでいるのが見えた。

彼が笑っていると、嬉しくなる。彼と話していると、胸の辺りがくすぐったくなる。こんな、穏やかで満たされていくみたいな時間が、ずっと続けばいいのに。

一通り見てから、フードコートで休憩することにした。私はイチゴとバナナが入ったクレープ。クレープの生地はもちもちしていて、たっぷりのホイップクリームとチョコソース、それと果物の甘味と酸味が楽しめる。幸せ。向かいに座っている純平くんが、何だかほっこりしているような顔で、ウーロン茶をストローですすっていた。

「この後、お土産屋さんも見に行こうか」

「うん、行きたい！ ぬいぐるみとか、いろいろ見たいな」

話をしながら、クレープの最後の一口を飲み込んだとき、横から声がした。

「あ～。もしかして熊谷？ 熊谷でしょ？ 熊谷だよな？」

鼻にかかったような甘い声。ピンクパープルのインナーカラーを入れた髪。私たちと同じ歳くらいの女の子は、リボンやフリルが付いた黒いワンピースを着ていた。家族連れや高校生くらいのグループもいるフードコートでは、なんとなく浮き上がって見える。

「久しぶり～。あいかわらず暗そうじゃん。何でここにいんの？」

純平くんの肩が、びくりと震える。うつむいた彼の顔を覗き込むように、女の子が体をかがめた。純平くんの知り合い？ それにしては、純平くんの様子がおかしい気がする。すると、また同じ歳くらいで、髪を金色に染めた男の人が近づいてきて、女の子の肩を抱いた。

「何してんの？ 早くこっち来いよ」

「ごめーん。熊谷と会えたから懐かしくってえ」

「は？ うわ、ほんとだ。熊谷さあ、何で卒業式来なかったわけ？ 俺たち寂しかったんだぜー？」

よく見ると、純平くんの体が、小刻みに震えていた。その様子を、私はよく知っている。初めてカフェの外で会った時と同じだ。明らかに、この2人を怖がっている。どうしてか分からないけど、私は椅子から立ち上がっていた。

「あの、お話し中すみません。どなたですか？」

地雷系みたいな格好の女の子と、私の目が合う。ほんのり赤いアイシャドウが塗られて、黒々としたまつ毛に縁どられた目が少し丸くなり、きゅうっと弓なりに細められた。

「あ、熊谷のカノジョ？ デートの邪魔しちゃってゴメンね？」

「へえー、けっこうカワイイじゃん。この後オレたちとカラオケとかどう？ 熊谷といるよ

り楽しいと思うぜ」

「へ？ いや彼女じゃなくて……、痛っ」

ぐい、と金髪の人に、いきなり手首を掴まれる。相手のことを考えていないような、強引な力加減だった。半ば引きずられるような形で、私は引き寄せられる。

「やっ、痛いんです。離してください……！」

「ちょっと～。カノジョちゃん怖がってるよ～」

「えー、オレ怖がらせるつもりないんだけど。傷つくなー」

女の子が、深い赤に染まった唇に指先を当てて、くすくすと笑う。金髪の人も、へらへらと軽そうな笑顔を見せるだけで、手の力を全然緩めてくれない。振りほどこうとしても、振りほどけない。

その時だった。ガタン、と椅子が動く音がして、伸びてきた腕が金髪の人腕を捕らえる。ぎり、と指先が食い込むようだった力が弱まる。金髪の人腕を掴んでいたのは、純平くんだった。元々白い顔が青ざめていて、唇をかみしめて、でも長い前髪から覗く瞳は立ち向かうような色をしていた。

「……何？」

「……ッ」

さっきまでの笑顔が嘘みたいに、金髪の人が冷たい顔になる。低く落とした声に、純平くんがたじろぐけど、それは一瞬だけだった。

「……手、離せ……！」

獣が唸るような、耳に残る声。純平くんを不機嫌そうに見てから、金髪の方は興味が失せたように、私からぱっと手を離れた。

「つまんね。冗談じゃん。行こうぜ」

金髪の人と女の子が、テーブルから離れ、姿が見えなくなる。その途端、糸が切れた人形みたいに、純平くんがへなへなとその場にしゃがみこんだ。ハッ、ハッ、と荒い呼吸が聞こえ、自分の体を抱くようにして震えている。

「じゅ、純平くん、どうしたの？ 待ってて、水もらってくるから……」

セルフサービスで置いてある水を取りに行こうとしたとき、純平くんの手が私の手を握った。訴えかけるような上目遣いに、私は動けなくなる。でもそのままにしておけないから、純平くんを椅子に座らせて、私は彼の冷たい手を包むように握っていた。びくびくと鼓動する、小さな生き物みたいな手を、ゆっくりさする。そうしているうちに、少しずつ震えが治まっていった。

「……ごめん。手、だいじょうぶ……？」

「大丈夫だよ」

赤い跡が残っている私の手首を、純平くんが辛そうに見つめる。自分も同じ痛みを感じているみたいで、見かけほどひどくないと伝えるために、私は明るく振る舞って見せた。

「……本当にごめん。俺のせいだ。俺と一緒にいなかったら、こんなことには……」

「純平くんのせいじゃないよ。何か理由があったとしても、先に手を出してきたのはあの人たちでしょ。純平くんは何も悪くないよ」

「でも……」

もふもふのクマの手に包まれていない、純平くん自身の手は、骨ばっていてしっかりしていた。私の柔らかい手とは正反対の手を握って、私は純平くんの目を真っ直ぐに見る。

「純平くんは、何も悪いことなんかしてない。私のことを助けてくれて、ありがとう」

よく見ると、緑が少し混ざったような薄い茶色で、カラーコンタクトのように綺麗な色の瞳だった。どこかぼんやりしているような彼の目が揺れて、一粒だけこらえきれなかったように、雫が頬を滑っていく。

純平くんが落ち着いてから、「今日はもう帰る？」と聞くと、純平くんは首を横に振った。私もせっかく水族館に来たのに、微妙にしょっぱい気持ちのまま帰るのは嫌だったから、予定していた通り、お土産屋さんによることにした。純平くんはまだ少し元気がないみたいで、ひな鳥みたいに私の後ろを歩いている。「こんなのあったよ」と、つぶらな目のダイオウグソクムシやセンジュナマコのぬいぐるみを見せると、少し笑ってくれた。お菓子やマグカップ等の別のお土産も見ていると、ガラスでできたアクセサリーを売っているコーナーがあった。ミントグリーンの羽の形をしたペンダントや、乳白色の貝の形のイヤリングもある。純平くんも気になったようで、虹色のクラゲのストラップを手にとっていた。

「……これ、花守さんに似合いそう」

「わあ、綺麗だね」

そう言って純平くんが指さしたのは、透き通ったクリオネのペンダントだった。アクアブルーのグラデーションがとても綺麗で、真ん中にぽつんと淡いピンクの点がある。純平くんが何かを選んでくれたことなんて初めてだ。何だか嬉しい。

純平くんがクラゲのストラップとクリオネのペンダントを持って、レジに向かう。私も何か買おうかな。そう思いながら眺めていると、青いイルカのブックマーカーを見つけた。ダイオウグソクムシのぬいぐるみストラップと一緒に、ブックマーカーを手にとって、私は純平くんの後ろに並んだ。

「……今日は、ありがとう」

「こっちこそ。いろいろあったけど、純平くんと回れて楽しかったよ。海の生き物について詳しくなれたし」

お店を出てから、純平くんがペンダントをくれたので、私もブックマーカーを渡した。予想していた通り、読書が好きな純平くんは喜んでくれて、ほっと安心する。

それから数週間。

純平くんからの連絡が途絶え、私と純平くんが出かけることは無かった。

夢を見た。真っ暗な穴に落ちていくみたいに、純平くんの体が沈んでいく。ダークブルーの水の中で、彼の姿を見失わずに済んでいるのは、彼が白いパーカーを着ていたからだった。助けなきゃ、手を掴んで引き上げなきゃ、と思うのに、固定されたみたいに体が動かない。一生懸命に手を伸ばしても、指先がかすりもしなくて、全然彼に届かない。私が何もできないまま、純平くんの体がすうっと透けていって、どんどん水に溶けていく。とうとう、残された衣服だけが、寂しくたゆたった。

「純平くん！」

そこで目が覚める。頬が少し濡れていて、手で目をこすると、ぼやけていた視界がクリアになる。夢を見ながら泣いていたのだ、ということに気づいた。

“ほとんどのクラゲは死ぬと、水に溶けて消えるんだって”

純平くんが教えてくれたことを思い出す。どうしてあんな、純平くんがクラゲみたいに消える夢を見たんだろう。

“自然と一体になってるみたいで、俺は好き”

まるで、自分もそうなりたいような、憧れているみたいな目で話していたから？

布団をガバリと跳ね除けて起き上がる。洗濯機の電源を入れ、パジャマを脱ぎ、今日着る服を引っ張り出す。今日は土曜日。どうしてもハンドシェイク・カフェに行かなきゃならないような気がして、私は朝の支度を急いだ。

ドアチャイムが、いつもより大きな音を立てる。カウンターにいた熊谷さんが、ちょっと驚いたようにこっちを見てから、「いらっしやい」といつもの笑顔で声をかけてくれた。

「あのっ、クマくんいますか？」

「ごめんね。今日は、クマくんはお休みなんだ」

「え、具合でも悪いんですか？」

私は戸惑った。純平くんは毎日のように、カフェでドリンクやスイーツを渡す仕事をしていて、それを欠かした日なんて私の知る限り無いはずだ。そんな彼が休むなんて、ただ事じゃない。そう感じた。

「そうだね。君が良ければ、あとでお見舞いに来てくれないかな？ クマくん——純平も、きっと喜ぶと思う」

「……熊谷さん。1つ聞いてもいいですか？」

熊谷さんの表情が、真面目なものに変わる。私が思い詰めたような、訴えかけるような顔をしていたからかもしれない。私は、ずっと気になっていたことを口にした。

「……純平くんは、どうしてここで働いているんですか？」

顔を見せず、お客さんと言葉を交わすことも無い。クマの手に人間の手を隠して、「クマくん」という架空のキャラクターを通して、他の人と関わっている。純平くんが、他の人を怖がっていることと、何か関係があるのだろうか。

知りたいと思った。知らなくちゃいけないと思った。彼と向き合いたい、彼が何を抱えているのか理解したいと、あの水族館での出来事があってから、強く思った。

「……」

熊谷さんの目を、食い入るように見つめる。私の視線を静かに受け止めて、真っ直ぐに見つめ返してから、熊谷さんは口を開いた。

「君になら、話してもいいか」

熊谷さんがカウンターを出て、一旦店の外に出る。そして戻ってきたかと思えば、カウンターの隣のスペースに引っ込み、カップを2つ持って出てきた。優しい匂いと、香ばしくてほろ苦い匂いが、ふんわりと漂う。

「遅くなってごめん。CLOSEDの看板を出してきたから」

「どうぞ」と私の方に差し出されたカップには、ジンジャーミルクが湯気を立てていた。カップを持って、カウンターの向かいにあるベンチに腰かける。熊谷さんはコーヒーを1口飲んでから、どこか遠くを見るような目つきになった。

「純平がここで働いているのは、人とのつながりを絶たないようにするため、かな」

「純平は昔から人を怖がっていたわけじゃない。控えめなところはあるけど、中学の時までは、普通に人と関わることが出来ていた」

「俺も、後から人に聞いたんで、詳しいことは分からない。けどはっきり分かっているのは、あいつが高校でいじめにあっていたことだ。それも人格を否定するような、陰湿なものだったらしい」

いじめという言葉に、こくりと息を呑む。熊谷さんによると、純平くんがクラスの中で特に目立つ人に目をつけられて、殴ったり蹴られたり、悪口を言われたり、クラスで孤立するように追い込まれたりしたらしい。水族館で絡んできたのは、その人たちなのだろうか。

「それが原因で、純平は人を怖がるようになった。当時は部屋からも出られなくなって、純平の両親——俺の兄夫婦はそんな純平を責めた。『何で普通に出来ないんだ』って」

どこにも味方が無い純平くん、真っ先に手を差し伸べたのは、熊谷さんだった。

「『純平には休む時間が必要なんだ』って、説得するのに骨を折ったよ。それから俺が暮らしてるマンションに純平を移して、今に至ってる。もともとカフェを開きたいと思ってて、シャンハイのカフェをネットの記事で見てから、純平の心のリハビリになるんじゃないかと思ったんだ」

そうして少しずつ、純平くんが人に慣れてくれればと、熊谷さんは願ったそうだ。

「この壁に描かれたツタや花の模様、純平が描いたんだよ」

改めて壁を眺める。柔らかな曲線のツタは爽やかな黄緑。花は小さいものもあれば大きなものもあって、ツタを彩るように、赤やオレンジ、水色や紫が咲きこぼれている。明るい気持ちになれるような、絵本のようなデザインと色合いだ。

「君と会って、純平は変わった」

「自分の気持ちを、誰かに伝えたいと思えるようになった。家の外に出られるようになった。」

俺以外の誰かと、顔を合わせて関われるようになった」

「苦しんできた純平を知っているから、俺は本当に嬉しかった」

「花守ちゃん。純平と仲良くしてくれて、本当にありがとう」

熊谷さんが親愛のこもった顔で、にっこりと笑う。自分はそんな大層なことをしているなんて思っていなかったから、私は照れてしまって、もじもじと身を縮めた。冷たくなり始めていたジンジャーミルクの存在を思い出し、こくこくと飲む。

今日は特別に、お代は払わなくていいと熊谷さんが言ってくれたので、ありがたくごちそうになった。

3日後。会いに行ってもいいかメッセージを送ろうとしたら、久しぶりに純平くんから連絡が来た。『見てほしいものがあるので、家に来てください』というメッセージに加えて、住所の情報が書かれている。教えてもらった場所に向かい、住所の番号を確認しながら、部屋の呼び鈴を鳴らした。すると、純平くんがドアの鍵とチェーンを外してくれた。

「突然呼んでごめん。来てくれて、ありがとう」

「大丈夫だよ。純平くんは体調とか平気？」

「うん。前はお腹とか頭とかが痛かったけど、今はもう大丈夫」

テレビやソファ、ミニテーブルや観葉植物が置かれているリビングに案内され、軽く話をする。見たところ、顔色は悪くないし、心配しなくても大丈夫かな。

「これを、見てほしかったんだ」

別の部屋から、大きめの画用紙を純平くんが持ってきて、テーブルの上に置く。そこに描かれていたのは、1人の天使と1匹のクマだった。天使の髪は羽のようなフワフワの巻き毛で、エーデルワイスの花が飾られている。着ているのは、純白のワンピース。背中にある翼は、大きな白フクロウみたいで、よく見ると影に緑や水色が塗られていた。洞穴から傷だらけの茶色い体を半分出しているクマの前足を、天使の小さな白い両手が握っている。どちらも相手を宝物のように見つめていて、優しく透明感のある水彩画だ。

「きれい……」

「……ずっと描きたいと思ってたんだ」

絵に見とれながら、素直に思った感嘆を口に出すと、純平くんがぼつりぼつりと話し出した。

「花守さんと、もっと話したいって思うようになってから」

「……水族館で、同級生と会った時。情けないけど、俺、すごく怖かった。でも、花守さんがいたから、初めて立ち向かえたんだ」

「花守さんが、俺に勇気をくれたんだよ」

よく見たら、熊谷さんに切ってもらったのか、美容院に行ったのかは分からないけど、純

平くんの髪が少し短くなっていた。だから、純平くんの目も、表情も、前より良く見えるようになっていた。

「いつもありがとう。俺、花守さんに会えて、本当に良かった」

雲間からこぼれる光みたいに、温かで満たされていて、守りたくなるような笑顔。彼のそんな顔を見たとき、胸の奥を甘い痛みが駆け抜けた。

「私も、純平くんに会えてよかった」

握った彼の手は、しっかりとした感触があって、低めだけどちゃんと彼の体温が伝わってくる。夢や幻のように、跡形もなく溶けて消えたりはしなかった。

END